

船舶移送をうけた

奥羽出張病院患者の転帰

中西淳朗

一、戊辰戦争第二期の六月十六日、東征軍は「常磐」地方の平潟港に上陸した。薩摩藩を中心とした東征軍は直ちに小名浜、平方面に北進し、奥羽列藩同盟軍と激戦に至る。

阿波藩医・関寛斎を頭取とした奥羽出張病院の一行は翌十七日上陸し、地福院に病院を開設した。関寛斎は任命された六月八日より半年間、「奥羽出張病院日誌」をつけた。演者は未見のため、今回の研究に際し、佐久間温巳氏の「奥羽出張病院日誌」の研究（医譚五三、五四号—昭57、60）と、「横浜軍陣病院日記」とを照合して統計的な考察を行い、これらに伴った事項に言及した。

二、平潟から横浜に戦傷患者を運送した第一便は、六月二十一日の平潟出港の飛隼丸^{シユン}で、帰路便を利用したこととなる。同二十五日出港の三邦丸も同じである。七月下旬までに平潟乃至小名浜より横浜に送られた患者は六便で一三二名。軍陣病院日記に従えば、うち内科的疾患は三四名を数える。内科患者は七月二十一日以降の横浜着の第四便以後に移送された人達に含まれている。

一三二名の移送患者のうち、横浜軍陣病院で死亡したのは計一四名。うち二名が内科患者（腸管感染症か）であった。

移送された戦傷患者のうち、傷の部位、種類、程度等が軍陣病院日記に記録されている人達は、第三便・安里丸移送の一一名の中の一〇名を数えるのみであった。

三、死亡者数を藩別にみると、薩摩五、柳川と因州各三、備前二、佐土原一、大村〇であった。全患者数からみた死亡率は一〇・六％で、戦傷者数からみた死亡率は二二・二％（第一—三便までみると一三・三％、第四—六便では一一・八％）となつている。

四、全患者一三二名中、死亡一四名、退院四一名、東京病院転送（横浜閉院のため）が三〇名であり、転帰不明が四七名ある。この四七名中、退院時の氏名記入もれ（その他一括されたもの）薩摩藩一一名、入院時と退院時で名前の異なるものはやはり薩摩藩の五名である。薩摩藩の移送された総数は四八名と最多であるためか、この様な次第となつている。しかし、他の五藩でも但書きを欠く全くの転帰不明が三一名を数え、備前藩が最も多く一四名を数えた。この不明四七名を、『幕末維新全殉難者名鑑』で調べたところ、一名も収載されていなかった。全員生きて帰国したものと考えられる。

五、移送患者をだした六藩のうち、因州藩のみが平城攻撃に参加していながら太政官代に報告していない。即ち『太政官日誌』には記録をみない。一方『鎮将府日誌』では、薩摩、佐土原、因州の三藩の平城攻撃の報告が収載されている。前者二藩の報告では、戦傷者の数、程度において二書の間には差異を認めなかった。

六、戊辰戦争第二期における関東、東北地方の主戦場六ヶ所における、戦傷患者の横浜への移送方法を調査した。その結果、今回のような船舶(英国船を含めた運送汽船)による移送は特別であったと考えられた。一連の調査研究において新発掘と云える移送方法は、和船による壬生―江戸間の黒川・江戸川移送(或は利根川境町―東京間の江戸川移送、那須堀越―那珂湊間の那珂川移送(或は磐城小野―平間の夏井川移送)の知見であった。ただし、カッコ内は裏づけを欠く。

なお、本誌第四十四巻一号一五一頁下段の最後の行に、壬生の一件記事をのせたが次の如く訂正する。『城の東方を流れる思川の支流黒川を和船(高瀬船)で下れる云々。』

七、今回の研究に際して、白河城内南面の西側に、土佐藩の病院を图示した中城家文書のコピーを、丹野美子氏よりいただいた。これも新知見であった。

(平成十年三月例会)

江戸の考証医家

小曾戸 洋

考証学は中国清代に隆盛をみた学問方法で、文献資料を博搜吟味し、客観的事実に基づいて過去の史実・事物の真相を

理を究明しようとするものであった。研究対象は広範な分野に及んだが、清朝における考証学は医学に関しては充分な成果を挙げるには至らなかった。これに対し、清朝考証学を受容した日本ではとりわけ医学の分野で考証学派の研究が大きく花開き、いくつもの著述として結実した。

中国における学医のほとんどは、科挙に及第できずして医に転じた者であり、医学の著述を遺した名医は、学者としては亜流に属していたといつても過言ではない。一方、日本で幕府医官や藩医といった公職の身分にあった医家は基本的に世襲の者で、上流階級にあった。加えて文献資料の豊富さという点でも恵まれていた。散佚の多かった中国に比べ、彼らは質量ともに中国をはるかに凌ぐ文献資料を手にすることができ、それによって業績を獲得しえたのである。中国の場合とはまったく逆に、江戸の医家達による考証の学は医学の枠を越え、経史ほかの漢籍、また国学にと広い分野に及んだ。たとえば幕末の漢籍書誌学の精華『経籍訪古志』は江戸の考証医家によって編まれたものである。以下、江戸の考証医家に属する主だった人物の略歴と業績について述べる。

目黒道琢(一七三九―一七九八)は松平定信の信任を受け、躰寿館で長年教授をつとめた江戸考証医学の開祖である。

多紀元簡(一七五五―一八一〇)は江戸医学館の主宰者で、医学における考証学の基盤を固めた。

鈴木良知(一七六一―一八一六)は目黒道琢の学風を展開した。